

転換文学論 : 大正中期から後期へ

小林, 茂夫 / KOBAYASHI, Shigeo

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

15

(開始ページ / Start Page)

47

(終了ページ / End Page)

56

(発行年 / Year)

1966-06-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019154>

転換文学論

——大正中期から後期へ——

小林 茂 夫

1

プロレタリア文学運動の成立が明治期以来の近代・現代文学史のうえに、どのような新しい歴史的意義をもたらしたか、という一般の命題を考察の対象とする場合、まず二つの新たな歴史的現象をあげる事ができる。それは、大正中期から後期にかけてのいわゆる「労働文学」と「転換作家」の出現である。この二つの歴史的現象は、文学における階級性の問題が具体的な日程となり、個々の文学者たちの思想と生活、創作方法のうえに転換時代が迫りつつあったことを意味している。まさに「新しき世界のための新しき芸術」(大杉栄、「早稲田文学」大正五年十月)が具体化されたのである。一九五一年(大正四)から一九年頃にかけて、宮地嘉六、宮嶋資夫、内藤辰雄、新井紀一、吉田金重、平沢計七(紫魂)などの労働者出身作家が輩出した。一方、その時期は労働者作家の活動に並行するかたちで、文壇では大正初期以来中期にかけて「民衆芸術論」がひろく論じられ、それが「労働文学」の主張へと進展されるなかで、

下層民衆や労働者の生活に取材した作品が多くあらわれている。小川未明『底のない社会』(大正三年、早稲田文学)などをはじめとして、久米正雄『牛乳屋の兄弟』(大正三年、新思潮)、徳田秋声『あらくれ』(大正四年、読売新聞)、宮本百合子『貧しき人々の群』(大正五年、中央公論)、田山花袋『一兵卒の銃殺』(大正六年)、有島武郎『カインの末裔』(大正七年、新小説)、江口渙『労働者誘拐』(大正七年、雄弁)、丹潔『民衆の為に』(大正七年、如山堂)、有島武郎『生まれ出づる悩み』(大正七年、東京日日新聞)、志賀直哉『十一月三日午後の事』(大正八年一月、新潮)、佐藤春夫『お絹とその兄弟』(大正七年、中央公論)などの作品が発表されている。これらの作品は、それぞれの作家にとって生涯の代表作に属するものである。中村星湖や上司小剣などは「民衆作家」と呼ばれている。通例の文学史的叙述に従えば、それらの代表作は、当時の自然主義、「白樺」派の人道主義、「新思潮」派、新現実主義などに分類されるのであるが、それらの思潮や流派にかかわりなく、ここでは一応「民衆芸術論」「労働文学」に先行・並行するブルジョア文

壇の動向として眺めるならば、それらの代表作が決して歴史的社会的条件とは無縁でないことが注目されると考えられる。さらに大逆事件以後のいわゆる「冬の時代」を経た大正中期の動向には森鷗外が『大塩平八郎』や『山椒太夫』（大正四年）を発表し、武者小路実篤が『或る青年の夢』（大正五年三月、白樺）、『友情』（大正八年、大阪毎日新聞）などの反戦的作品を発表していることなどをあわせてみれば、その時期の知識人作家の烈しい社会的関心がそれらの思潮や流派の基調に流れていたことを示すものと考えられる。もちろんその基調の推進力となったのはいうまでもなく大杉栄・荒畑寒村・堺利彦（枯川）らを中心とする社会主義者や、平出修や土岐哀果などの進歩的作家たちである。こうした動向とは結びつかず、分散のかたちで一九二〇年代（大正後期）と昭和初頭）の転換時代が形成されて行く。

ところで労働者作家たちの出現について注目されることは、進歩的革命的知識人文学者との提携・共同において出現し、発展をうながしたという点である。いいかえれば「転換作家」の出現とともに「労働文学」からプロレタリア文学運動の成立（「種蒔く人」の運動）の基本的条件となっているといえるのである。一般に文学事典の「労働文学」の項目では、たとえば最近刊行された「現代日本文学大事典」（久松潜一・木俣修・成瀬正勝・川副国基・長谷川泉編）にも筆者の高橋春雄氏は次のように解説している。

「大正八・三月には、小川未明・坪田譲治・藤井真澄・吉田金重・丹潔・内藤辰雄・新井紀一らを同人とした労働文学の雑誌『黒煙』と、加藤一夫らの『労働文学』とが同時に創刊される運びとなる。文壇に発言力を誇り得る雑誌ではなかったが労働者出身の作家と進

歩的な知識人との提携を示した特異な存在であり、むしろそうした運動の中に、当時の労働文学の社会的成熟という条件の成立を読みとることができよう。」

この指摘以外の宮地嘉六も、舟木重雄（重信の兄）・広津和郎・谷崎精二・相馬泰三らの雑誌「奇蹟」の準同人として葛西善蔵らと加っている。その後堺枯川の世話で「二十世紀」誌の雑務をやりながら処女作『佐吉』（大正四年、新公論）を発表して作家的出発を行っている。平沢計七も国鉄の鍛冶工として「文章世界」に投書したり、小山内薫に傾倒して、友愛会の労働運動にはいり、労働文学に近づき、のちわが国最初の労働劇団を組織した。このように労働者作家たちと「進歩的知識人との提携」は個人のかたちでも行われていたことがわかる。

ところが、その後の過程とその評価について、高橋氏は次のように解説している。

「こうして初め自然発生的であった労働文学は、大正一〇前後には大きな流れとなって成長し、労働文学論の盛行や中西伊之助・前田河広一郎・細井和喜蔵・葉山嘉樹らの活動を加えて開花してゆくのであるが、他方、大正九末の『日本社会主義同盟』の結成、翌一〇年の『種蒔く人』創刊によって始発したプロレタリア文学が、急激にマルクシズム文学・共産主義へと展開してゆくその過程で、自然に解消しまたは克服されていったのである。ただし、そうしたプロレタリア文学の共産主義文学的到達の時点から逆算して過小評価されがちであった労働文学に対しては、その歴史的意義についての正当な評価がなされなければならないことはいうまでもない。」

ここで問題点となるのは、高橋氏が「急激にマルクシズム文学・

共産主義へと展開してゆくその過程で、自然に解消しまた克服されていった」とみている点であろう。「労働文学」とのちのプロレタリア文学運動とをあたかも異質のものとしてとらえている。「共産主義文学的到達の時点から逆算して過小評価されがちであった」とさえ指摘しているのは、歴史的事実を歪曲するものである。なぜなら、「労働文学」とは歴史的な概念であり、その革命的発展をあわせて「プロレタリア文学」と呼称されたからである。「自然発生性」という概念もまた同様であり、のちの「目的意識性」によって克服されて行く過程において、大正中期に支配的であったアナルコ・サンジカリズムがマルクス主義における「左」翼修正主義の潮流として克服されたのは当然であったが、しかし「労働文学」が共産主義的文学者によって「過小評価」されたという歴史的事実はない。むしろ共産主義の立場によって正確に評価されているといえる。たとえば、窪川鶴次郎『プロレタリア文学史論』は、文学史の区分の問題として「大正十年の『種蒔く人』創刊以前をプロレタリア文学前史とする通説にたいして、大正中期の労働文学の出現から本史とすべきことを主張」（傍点原文のまま）している。この主張は、区分の問題であるが、わたしは「労働文学」と「転換作家」の出現と提携とをもって、両者が密接な関連をもってプロレタリア文学運動の成立条件の基本とみることに於いて、窪川説を正しい区分とする。そして、のちの革命文学としての性格を明確にするために初期プロレタリア文学と総称区分するのが妥当であると考えるのである。もし高橋説によるならば、のちのプロレタリア文学が「進歩的知識人との提携」も「自然に解消しまたは克服」されることになる。すなわち「転換作家」の存在が否定されることになるのではなからうか。

のちのプロレタリア文学運動は「労働文学」に支配的であった自然成長性やサンジカリズムによる知識人文学者を排除する傾向という誤った混乱を克服し、いつそ労働者作家と知識人文学者の「転換作家」との提携が強化されてゆくことになったが、もちろん、その過程は困難にみちており、とりわけ天皇制権力の弾圧が侵略戦争への前提として狂暴化した一九三三年以後のいわゆる「転向」、変節、停滞、動揺、再起という運動の退潮期、軍国主義専制下の荒廃の時期における曲折にみちた運命の歴史からみるならば、高橋説のように「自然に解消し克服された」とみえるかもしれぬが、それは歴史の過程を逆行させる見方にすぎない。

一般に文学史のうえで「転向文学」は大きな項目にかぞえられている。それとは反対に「転換作家」の問題は殆んど項目にさえとりあげられていない。もちろん後述するように、一時期の異常現象としてふれたものはあるが、しかし現代文学の歴史的必然性をもつ文学史的意義を解明したものはわずかしかない。したがって、この問題は「転向文学」に先行する問題であると同時に、今日の革命的民主主義文学運動にとってまさにアクチュアルな研究課題といわねばならない。

2

転換文学とは何か。それはどのような文学をいうのであるか。あらかじめ労働者作家との提携という視点からそれを歴史的現象として列挙してみよう。ここでは便宜上、それぞれの作家の文学的転換期と出発点をあげてみることにしたい。

プロレタリア文学運動の成立期を最初のメルクマールとして一九

二〇年（大正九）五月に結成された日本社会主義同盟と翌二一年に創刊された「種蒔く人」とその運動をもって成立をみる事ができるだろう。

周知のように日本社会主義同盟はわが国最初の社会主義者の大同団結といわれている。と同時にそれまでの進歩的文学者にとって、その団結に加盟するという事は、自己の思想と生活の一大転換であり、労働者階級への階級的移行を意識的に強化される転機をもたらしたとみることが出来る。事実、その同盟の発起人として、文学者から加藤一夫・大庭阿公・小川未明がたっている。そして秋田雨雀・江口渙・藤森成吉が先づ加盟している。翌二一年五月にその同盟は解散されたが、それまでに小牧近江・佐々木孝丸・村松正俊・尾崎士郎・平林初之輔・前田河広一郎などの加盟が記録されている。小牧らはいまでもなく「種蒔く人」の同人（尾崎をのぞいて）であることに注目させられる。新たな「労働文学」期につづく労働者作家として、前田河をはじめとして細井和喜蔵・中西伊之助・山田清三郎・葉山嘉樹・金子洋文・今野賢三・山川亮らの輩出があった。以上、関東大震災までを第二期とする。

第三期——「文芸戦線」創刊（一九二四年、大正十三）、プロレタリア文学者の最初の大同団結である日本プロレタリア文芸連盟の結成（二五年）から分裂（二七年、昭和二）と抗争（プロレタリア芸術連盟・日本無産派文芸連盟・労農芸術家連盟・前衛芸術家同盟）を経て、日本左翼文芸家総連合の創立（二八年三月）と全日本無産者芸術連盟の結成（同三月二十五日）に至る時期。転換作家・文学者として片上伸・江馬修・細田民樹・細田源吉・伊藤永之介・小島勲・越中谷利一・村山知義・神崎清・蔵原惟人・武田麟太郎・

壺井繁治・三好十郎・阪井徳三・上野壯夫・遠地輝試などの転換があった。またこの時期には、林房雄・久板栄二郎・中野重治・谷一（大田慶太郎）・川口浩・森山啓・鹿地亘らの、いわゆる「生えぬきのマルクス主義作家」（平野謙）の出發があった。いわば殆んど転換期をもたぬ作家の登場といえる。

一方、労働者作家として里村欣三・小堀甚二・橋本英吉・岩藤雪夫・鶴田知也・黒島伝治・平林たい子・佐多稲子・犬田卯・今村恒夫・今野大力らの出發があり、新たな農民作家・婦人労働者作家の登場が印象的である。

第四期——「ナツプ時代」または「戦旗」派と「文戦」（労芸）派との抗争時代ともよばれる時期、プロレタリア文学運動の開花期に当る。小林多喜二の転換をはじめ、宮本顕治・窪川鶴次郎・大宅壮一・勝本清一郎・間宮茂輔・松田解子・矢崎弾・ぬやまひろし（西沢隆二）・伊藤信吉・久保栄らの転換と出發があった。そしてこの時期の象徴的な転換として新感覚派からの片岡鉄兵・今東光・鈴木彦次郎・藤沢桓夫・小宮山明敏・北川冬彦・淀野隆三・梶井基次郎・高田保らのいわゆる「左傾」である。

労働者作家としての山内謙吾・山本勝治・徳永直・堀田昇一・木村良夫・田中忠一郎・貴司山治らの登場があった。

第五期——「コップ時代」とよばれる時期で、一九三一年（昭和六）から三三年にかけての運動最盛期である。この時期には文壇からの転換作家として宮本百合子の参加がある。そして新しい現象としてサークル運動や労働・農民運動のなかから出發する新しい革命作家・理論家・詩人・労働者作家が生れはじめている時期として注目される。生江健次・鈴木清・手塚英孝・木庄陸男・平林彪吾・高

見順・植村浩・長沢佑・本多秋五（高瀬太郎）・上田進・大江賢次（沢本鶴一）らの出発があった。労働者・農民作家では黒江勇・谷口善太郎（須井一・加賀耿二）・金親清・佐々木一夫らの出発があった。

第六期——一九三四年二月の日本プロレタリア作家同盟（ナルプ）の解散による分散・退潮期に入る。いわゆる「転向文学」の出現の時期であるが、島木健作・小熊秀雄ら労働者の作家や戸坂潤・本間唯一・三枝博音・近藤忠義らの文学活動がはじまる。またこの時期の注目すべき現象として張赫宙や金史良ら朝鮮人作家の出発があったこともプロレタリア文学運動のもたらした功績にほかならない。第二次大戦開始までの時期に壺井栄・豊田正子・小池（野沢）富美子ら婦人労働者作家の出現があり、岩上順一・小田切秀雄らの出発と活動もプロレタリア文学運動の遺した階級的知識人文学者であり、さらに戦後の時期からみるならば、この時期に芥川賞などで出発した岩倉政治や田中英光・半田義之らは、いわば戦後転換作家にかぞえることもできるだろう。

以上の列挙によっておおよその転換作家の問題の輪郭がみられると思う。それらを中心にしてその周囲にいわゆる「同伴者作家」とよばれた進歩的作家の活動がひろく行われていることも深く関連される問題である。明治期以来の森田草平・武林無窓庵・大正期の舟木重信らは戦後の転換であるが、有島武郎・広津和郎・山本有三・芹沢光治良・野上弥生子・林芙美子・大仏次郎ら、また「コップ時代」に結成された学芸自由同盟（三三年七月、昭和八）の徳田秋声・三木清・豊島与志雄・新居格・中島健蔵らの活動も現代的観点から再評価される必要があるだろう。

一九二〇年代の近代日本文学の転換期にあつて、知識人作家の転換点・出発点の中心をみると、およそつぎのような位相をとらえることができる。第一に細田民樹・江口渙・藤森成吉・江馬修・宮本百合子に代表されるように、比較的文壇生活のながい作家たちである。第二に比較的短い文壇生活をもち、転換後に成長を示した小林多喜二らの場合。第三に「生えぬきのマルクス主義作家」とよばれる中野重治らの場合。第四に片岡鉄兵などの一時的転換作家たち。第五に運動のなかで育成された本庄陸男・手塚英孝らの場合。

第六に出発と同時に「転向」と重なる高見順・島木健作らの場合と、いう特徴点があげられる。もちろん、それらの位相を明確に判別することのできない複雑な過程があることは、たとえば、高見順「昭和文学盛衰史」（一九六八年）が指摘しているとおりである。高見は平野謙氏が転換作家を「一、藤森成吉、中条百合子、江馬修に代表される人道主義的な傾向からの『転換』。二、片岡鉄兵から武田麟太郎、藤沢桓夫等に代表される新感覚派的な傾向からの『転換』。三、林房雄、中野重治、鹿地亘等に代表されるいわば生えぬきのマルクス主義作家。」というふうに三種に判別したとき、壺井繁治や村山知義などは「この三種のうちのどれに入れたらよいであろうか」と疑問をなげかけているのがそれである。平野氏の判別の基準がどこにあるかといえ、もちろん思想傾向の方向転換にあることは明らかである。したがって、思想と生活との統一という観点からとらえるならば、平野氏の基準が一面的であり、矛盾を露呈せざるをえないのは明らかである。わたしは、壺井・村山の場合は第二の位相に判別して考えるものであるが、それは個々の作家の転換点を作家と作品、その時代と生活との関連において明らかにされなければ

ならぬだろう。マルクス、エンゲルスが「階級闘争が決戦に近づく時期には、支配階級の内部・旧社会の内部における過程が、きわめてはげしい・きわめて鋭い・性格および、支配階級の、一少部分からはなれざり、革命階級、すなわち未来をその手におさめている階級にむすびつく。それ故、かつて貴族の一部分がブルジョア階級に移行したように、いまやブルジョア階級の一部分はプロレタリアートに移行する。ことに歴史的運動全体を理解するまでに努力向上した、ブルジョア階級の思想家の一部分は、プロレタリアートに移行する」(共産党宣言)とのべているように、社会的地位(階級)の移行であることを強調していることからでも明らかである。

3

労働者作家と進歩的革命的知識人作家との提携が「労働文学」の出現をうながした時点から、まさに一歩進めて階級移行へと転換の必要を自覚させられた時点は、大正中期から後期にかけての一九二〇年代の初頭であった。当時の総合雑誌や文芸雑誌を管見すると、たとえば「プロレタリアの専制的傾向に対するインテリゲンツィアの偽らざる感想」(中央公論、二一年九月号)というふうな特集が行われるようになっていく。米騒動(一八年)、朝鮮の「万才事件」(一九年)、最初のメーデー(二〇年)などの民衆運動の昂揚、ロシア十月革命とプロレタリア独裁の問題にたいして、単なる傍観者でありえない知識人の思想と生活の变革を衝撃せずにはおかなかった時点であることが、その特集に反映されているといわねばならない。そこには、杉森孝次郎「人類的要素の普認と労働概念の拡充」林癸未夫「階級闘争のキャスティング・ボート」、堀江帰一「無産階

級専制に対するインテリゲンチヤの感想」、小川未明「人間本来の愛と精神の為に」、三宅雪嶺「群衆運動と其統率者」、生方敏郎「和製のプロレタリアート何事を為さん」、千葉亀雄「内から開展する人道的な魂に依頼して」、赤木桁平「労働運動の傍観者として」上司小剣「趣味の低下を悲しむ」、永井柳太郎「直訳的態度を排す」、本間久雄「覚え書き」、湯原元一「慎重に熟慮すべき大問題」、吉野作造「プロレタリアートの専制的傾向に対する知識階級の感想」が寄稿している。これらを管見すると、赤木桁平のように「傍観者」を自称するもの、三宅のように民衆は「統率者」いわば独裁者なしにはおさまらぬとする支配階級の立場を明言しているものをのぞけば、階級闘争を積極的に認める立場をとる主張が多い。もつとも林癸未夫に代表されるように、階級闘争を認めながらも、プロレタリア独裁を否定するサンジカリズムの影響が強く支配しているが、しかし、そのなかでも文学者は鋭く知識人の階級移行を提起しているのが注目される。かつて民衆芸術論の発端をつくりだした本間久雄は「知識階級の人は、極めてその少数の人を除けば、思想において、感想において、全然ブルジョア階級の人である。彼等の望んでいる生活様式はブルジョア階級の人のそれである」と前提しながら、「しかし一方から云えばプロレタリアの運動は知識階級の指導によって始めてその十全の意味を実現する」として、つぎのようにならべている。「プロレタリアの運動の点火者となり、指導者となる知識階級者は真に極めてその少数である。蓋し、この少数者は事実において明らかに又、一種のプロレタリアである。そしてこの少数者あるがためにこそ、知識階級は現代の階級闘争において、重要な役目を演じつつあるとも云い得る」(傍点原文)と主張し、

わが国現代の知識階級者は今岐路に立っている」と結んでいる。だが本間の主張は現在からみれば、さまざまな矛盾を含んだ主張でもある。「知識階級」を「プロレタリアの運動の点火者となり、指導者」となる階級であると考えている点などの誤った影響がみられることである。けれども一面、労働者階級と知識人の進歩的革命的部分（少数者）との移行関係を積極的に認めて、そしてその時点で「岐路に立っている」と判断している点は、この特集のなかではもつとも鋭い主張であるとみななければならない。なぜなら、当時のサンジカリスト（マルクス主義における「左」翼修正主義者）の唱えたいわゆるインテリ排撃論にたいする誤りを指摘していることにもなるからである。また千葉亀雄は階級闘争によって「自我」の変革が起りつつあることを指摘している点も見逃すことはできない。千葉はトルストイの人道主義に傾倒しながら、十九世紀以後「偉大なあの個人主義が確立され、自我の権威が合理的生活の上に創造されたことは、何といても人間成立の歴史の上の最大の記録と見て差支えない。けれどもあまりにも自我の凝視をばかり偏向を傾けて、広い人類の世界との交渉を忘れて了った刹那に、そこに怖るべきエゴ・マニヤが生れた」として、その「エゴ・マニヤ」との対決をみている点で、近代日本の知識人にとって新たな自我の変革をもたらしたことを認めている。前年の日本社会主義同盟の発起人となった小川未明は、インテリゲンチヤ一般と労働者のインテリゲンチヤとを区別している。「私は斯うした所謂インテリゲンチヤには何らの同情もない。彼らは血と汗を流して生産に従事している、本当に人間らしい労働者に対して彼れ是れ云う権利はない。併し茲に人生のためには一身を捧げている科学者、若しくは思想家のような人々を指し

てインテリゲンチヤと云うならば、私はそれらのインテリゲンチヤの精神は即ち同じようにプロレタリアートの精神であると云い得る」と主張している。

以上を通じていえることは、いづれも人道主義的立場から知識人の階級性とその移行の可能性を追求しているといえる。しかし反面それが歴史的必然性をもつ点での説明は、本間の社会心理学的見地にとどまっていたといえる。むしろ知識人の精神運動としての労働者との一体感をめざす段階に立っているというべきかもしれない。上司小剣のように、自己の生活においては社会主義者に近い存在を示しながら、また作品において民衆をえがくことを示しながらも「趣味の低下を悲しむ」といった感想をもらさないでいられない矛盾をはらんでいるのである。それは社会変革との結びつきを精神運動において受けとめていた段階での矛盾にほかならない。

翌二二年（大正十一年）に入ると「改造」三月号に「文芸と階級意識」という特集が行われている。武者小路実篤「階級と文芸」、加藤一夫「プロレタリアートはそれ自身の文学を要求する」、宮島新三郎「芸術と階級」、里見弴「なんのかがかりもなし」という寄稿がある。この特集はちようどその年一月号に有島武郎「宣言一つ」が発表され、平林初之輔「第四階級の文学」と宮嶋資夫「労働文学の主張」（解放、一月号）が発表されて二月後のことである。知識人の階級性でなくて「文芸の階級意識」となったのはそのためであろうと思われるが、しかし政治と文学との関連においてみると、それは興味深い特集であったと考えられる。武者小路が「私は文学に国境がないと云うことを認めると共に文学は階級を超越する」と宣言しているからである。この宣言から二ヵ月後に菊地寛「

芸術の本態に階級なし」(新潮、五月号)とする有名な宣言を發している。その特集では加藤一夫が小川未明と同じく「プロレタリア」としての思想と感情を表現する」と自己の立場とが一致することを強調している。ほかに宮島新三郎がブルジョア文壇の「萎微沈滞」を批判しつつも、「芸術を階級闘争の具とする」考え方に反対し、里見弴が芸術の純純性を擁護するという点から、階級性とはかわりないことを主張している。このように政治と文学との関連において、はっきりと階級性を肯定する立場と否定する立場との分岐点がきびしい対立状況を示す段階に入ったことがわかれると思う。同時に白樺派的人道主義の崩壊である。

こうした対立状況のなかで分岐点を階級移行の問題としてもっとも深刻なかたちにおいて提起されたのが有島武郎「宣言一つ」であった。そして有島の宣言が歴史的衝動としての意義をもたらしたのは、階級移行が単に思想上の方向転換でなく、思想と生活との統一過程においてなされること、そしてそのことが有島において分裂のかたちにおいて宣言されたということ、まさにその点において衝撃を与えたということになるのだと考えられる。だから階級性の肯定に立つ人々からの批判が行われたのは当然であった。広津和郎・片上伸・堺利彦・河上肇らとの論争は「現代日本文学論争史」(平野謙・小田切秀雄・山本健吉編、五六年)の全三巻の巻頭に収められ、平野謙氏は「日本の文芸思潮が新しい段階にさしかかった」と評価しているのは妥当であると考えられる。

だが、当時の転換作家たちは、この有島の宣言をめぐってどのような態度を示したであろうか。その論争史に収められたもの以外に、階級移行の問題として思想と生活との統一の観点から有島の分

裂を指摘した作家として、細田民樹・江口渙・藤森成吉らの立場にぜひともふれなければならない。なぜなら、論争そのものは理論と創作との関係において、理論家ばかりでなく作家の立場をみないのは、もちろん片手落ちとなるからである。作家の立場から解明したのは、広津とは別にその三人の作家たちであった。文芸雑誌としてこの問題にもっとも多くとりくんだものとして「新潮」がある。細田民樹「プロレタリア文学宣伝者に」(二二年四月号)と江口渙「階級と文学との関係を論ず」(同五月号)という比較的長い論文がそれである。その要点を要約してみると、細田の主張は、知識人出身プロレタリア作家の弱点として、ただその思想を宣伝したり運動したりして満足しているものがあるが、「直接生産の労働に従事せねばならない」と主張していることである。「真にプロレタリアの為に、プロレタリアの世界出現の為に、引いてはそれに対する合理的な自己完成の為に、プロレタリアを熱愛するなれば是非とも、筋肉労働に従事しなければならぬであろう」という。ここには、小川未明らの精神的共感を一歩進めて、有島が否定した生活上の変革の問題を、労働参加のかたちにおいて生活変革の可能性をうちだした点で注目されるのである。しかし細田は一方において、作家の創造行為を「所謂精神労働を以て満足な生産と考えるには、余りに多くの良心を持ち過ぎている」というふに、否定的に対立させている点がある。それまでのありがたいだけの白樺派的人道主義の立場を転換させるのに、こうしたかたちにおいて提起せざるをえなかった点に、細田の理論的態度のなかに、サンジカリスト平沢計七らの主張と合致させようとする一面をもつていたといわねばならない。すなわち、平沢らのインテリゲンチヤ排撃論にこういう思想性ぬきの

かたちで積極的に転換の可能性を与えようとしたと考えるのである。そこに有島の敗北的態度からの前進が用意された点をわたしは評価したい。

江口渙の場合は細田よりもいつそう理論的に前進させている。江口はまず「文学は階級を超越する」という考え方にたいして、「凡そ一つの時代が亡んで次の時代が起る時には、前の時代の社会組織の崩壊の中に、必ず次の時代の社会組織の種子を有し、萌芽を蔵しているものだ。しかも、その種子や萌芽は前の社会組織の中にあつては何等の考慮も払われずに絶えず踏みにじられていたにも関わらず、次の社会組織の中にあつては全社会の基調となつて力強く伸びるものだ。そして文学の中の或る種のものが、その生れた時代とは全く異なる社会組織の中にあつても、尚好く存在を持続し価値を保持することが出来る」ことを強調している点である。すなわち「労働文学」の革命的性格とその歴史的位置づけを革命の持続性と芸術的真実性とが持続的に一致している点を明らかにしている点である。すなわち文学における階級性の問題をこのような革命の持続性においてとらえた点において、有島はもちろん、当時のプロレタリア文学の理論的指導者であつた平林初之輔の理論よりもするどい指摘があつたとみることが出来るだろう。のちの「芸術的価値と政治的価値」の論争の発端をなした平林の懷疑論をも先行的に批判しているといえる。そして、階級性の否定から「労働文学」の存在をも否定する立場にたいして、労働者階級「自身の芸術を持つ」という原則を承認している」という点において、宮嶋の主張、片上の有島批判に共感を示している。しかし江口はまた一方において「インテリゲンチヤの是非ともしなければならぬ仕事」として、「資本主義の洪

水に依つて殆んど不毛の野にされた社会の一部に、階級意識の良き種子を蒔いて歩く事」にその仕事を限定しつつ、「同時にこう云う性質に於ては、インテリゲンチヤ文学が第四階級の運動に参加出来ない筈はなからう」とのべている。ここには、細田が生活上の転換を提起しているのにたいして、江口は思想の転換を提起しているという点に両者の相異点があるといえよう。しかし作家の立場において白樺派の人道主義やサンジカリズムからの転換がこの二人の論文によつてすでに明らかとなつたといふことができる。

こうして残された問題は、細田が精神労働と生産労働とを対立させた誤りを生産労働によつて精神労働を改革すること、いいかえれば自己変革と社会変革との統一への道にすすみ得ること、このことが革命的文学理論によつて統一されることを江口の論文が示唆していることを意味している。江口がインテリゲンチヤの役割を限定している点を打破すれば、そこにおのづから時代の先端を新たに開拓することになり、転換時代が当来することになるのだと思う。新たな開拓者となつたのは、ほかならぬ藤森成吉の場合であつたことはいふまでもない。そしてその転換も細田や江口のように政治思想としてサンジカリズムの克服が課題として同時に伴っていることも注目されるだろう。江口の場合、理論上の芸術の持続性の問題はマルクス主義によりながらも、インテリゲンチヤの役割を限定させている点においては、サンジカリズムの影響を残していたからである。藤森の転換が新たな開拓としての意義をもつのはそれらの残された課題を、生活と思想において統一しえたという点は、政治思想においてマルクス主義の立場にたち、当時の文学に強い影響をもつた「左」翼修正主義(サンジカリズム)トロツキズムとの理論的克服

を通じてであったということの意味している。このことは一方において、「種時く人」の運動が第二インターの崩壊をもたらしたカウツキの修正主義にたいして、レーニンの第三インターの紹介とそのための思想運動を第一の旗印としてかかっていたこと、のちのプロレタリア文学連盟への展開とあわせて考えてみると、藤森がその運動の影響のもとに転換したことも見逃せないだろう。こうしたなかでの藤森の思想と生活の転換について、とくに理論面での業績を宮本百合子はつぎのように評価している。

「有島武郎の悲劇的な終焉後、労働生活に入り『狼へ』という報告文学を発表した藤森成吉は、一九二六年『無産階級文芸論』を『社会問題講座』（注・新潮社刊）に書いて、これまでのプロレタリア芸術理論で不明確であつたいくつかの点を整理した。第一、プロレタリア文学とは、貧困、反抗、労働などばかりを書く文学ではなくて、現代資本主義社会のあらゆる問題をとらえて題材とし得る。プロレタリア文学は、ただ題材や作者の出身階級によって生まれるのではなくて、『作者の精神の問題』である。プロレタリアとしての意識がかけているならば、題材ばかり労働を描いても何らプロレタリア文学ではないということ。第二、プロレタリア文学が労働者とその階級出身の作家によってでなければ生れないと考えることは誤っている。知識階級の作家であろうとも本当に現代の歴史の中でプロレタリアが担当している任務を知り、その立場に立つ者ならば、それはプロレタリア作家と言い得る。歴史のすべての例を見ても『偉大なインテリゲンツィア出身の革命家が理論のみならず実行において、如何に働き献身し、実効をあげたか』労働階級が自分たちの文学を生みだす過程に知識階級は協力するものとして理解され

た。第三に、プロレタリア文学の形式の問題がとりあげられた。初期の自然主義的な手法にあきたりない金子洋文、村山知義などのドイツの表現派の影響をうけ、エルントス・トルラーやカイゼルを追随していたが、ルナチャルスキーが表現派を大戦後のドイツ市民的感覚から発生した様式であるとした判断に賛成して、プロレタリア文学の様式は表現派でなければならないという一部の論に反対した。」（婦人と文学）

この宮本の評価について、わたしは作家と作品の展開、青野季吉や藤原惟人・宮本顕治の理論活動などから検討を加える予定であるが、それは稿をあらためてのべることにしたい。

正誤表（第一四号） 助動詞の連接		水野 清
51 上 23	べきである。	べきである。注1。
52 下 9	『あらましい』	『あらまほしい』
52 下 16	申たく候おほく	申たく候事おほく
53 下 22	「ベカンナリ」	「ベカンナリ」
55 上 3	ケマク	ケマク
55 上 13	2 1 尽してぬ	1 2 尽してぬ
58 上 9	に「し」 256	「にし」 256
60 第8表	（仮想欄） らむ	らむ
62 上 12	「ヌ」系の1/3	「ヌ」系の1/3。
62 上 20	にも及ばぬ有り様	にも同じい有り様